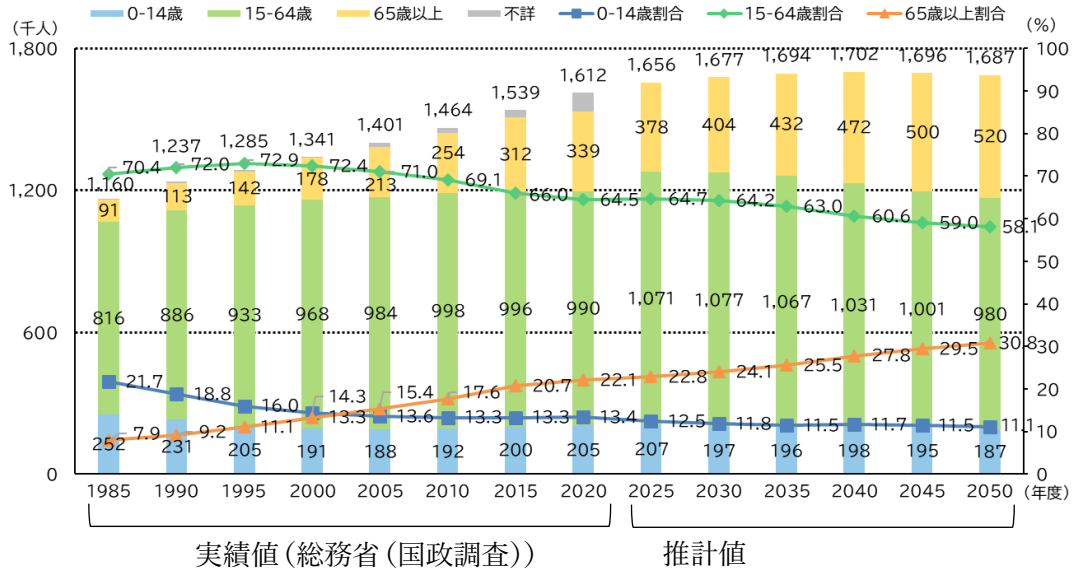


## 2 社会条件の現状

### (1) 人口推移

福岡市の2024(令和6)年度の人口は165.6万人で、2000~2005(平成12~平成17)年度にかけて老年人口が年少人口を上回り、その後も少子高齢化の傾向が続いています。2040(令和22)年度頃には約170万人に達し、ピークを迎えると見込まれています。



出典:福岡市の将来人口推計(2024(令和6)年4月)より作成

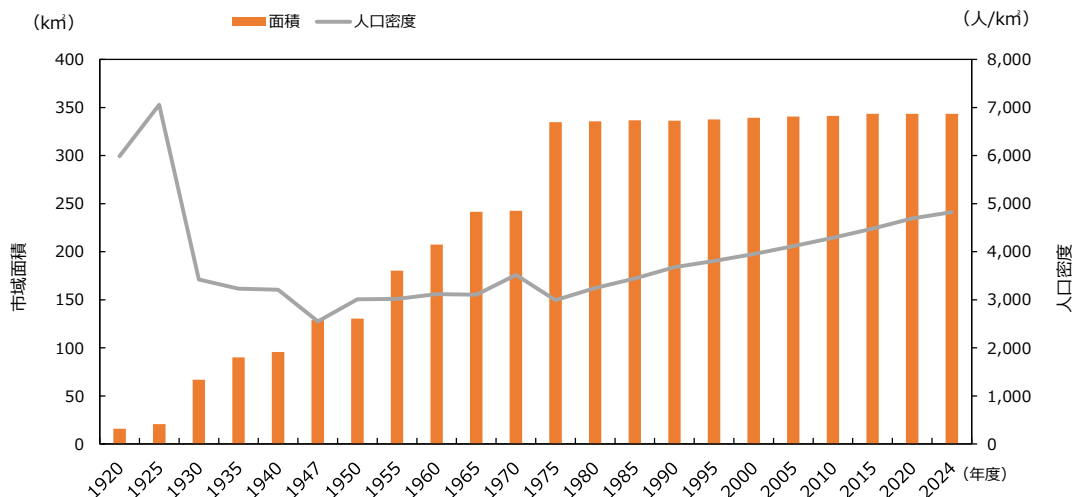
図 22 人口推移と将来推計人口

人口・人口密度の増加に伴う開発などにより土地利用が変化していますが、人口増加を踏まえると災害時の避難場所として都市公園などの公共用地の整備が求められます。また、長期的には人口減少にも対応したまちづくりを進める必要があります。

加えて、外国人の増加や世帯当たり人員の減少(核家族化)、少子高齢化をふまえ、地域コミュニティの維持が課題となっています。人口の流動性が高まり地域コミュニティが希薄化することで、祭り・伝統芸能の継承が難しくなる可能性があります。

## (2) 市域面積と人口密度

2024(令和6)年度の市域面積は343.47 km<sup>2</sup>、人口密度は4,824 人/ km<sup>2</sup>です。市域面積は1975(昭和50)年以降微増ですが、人口密度は増加傾向であり、49年間で人口密度は1 km<sup>2</sup>あたり約1,830人増加しています。



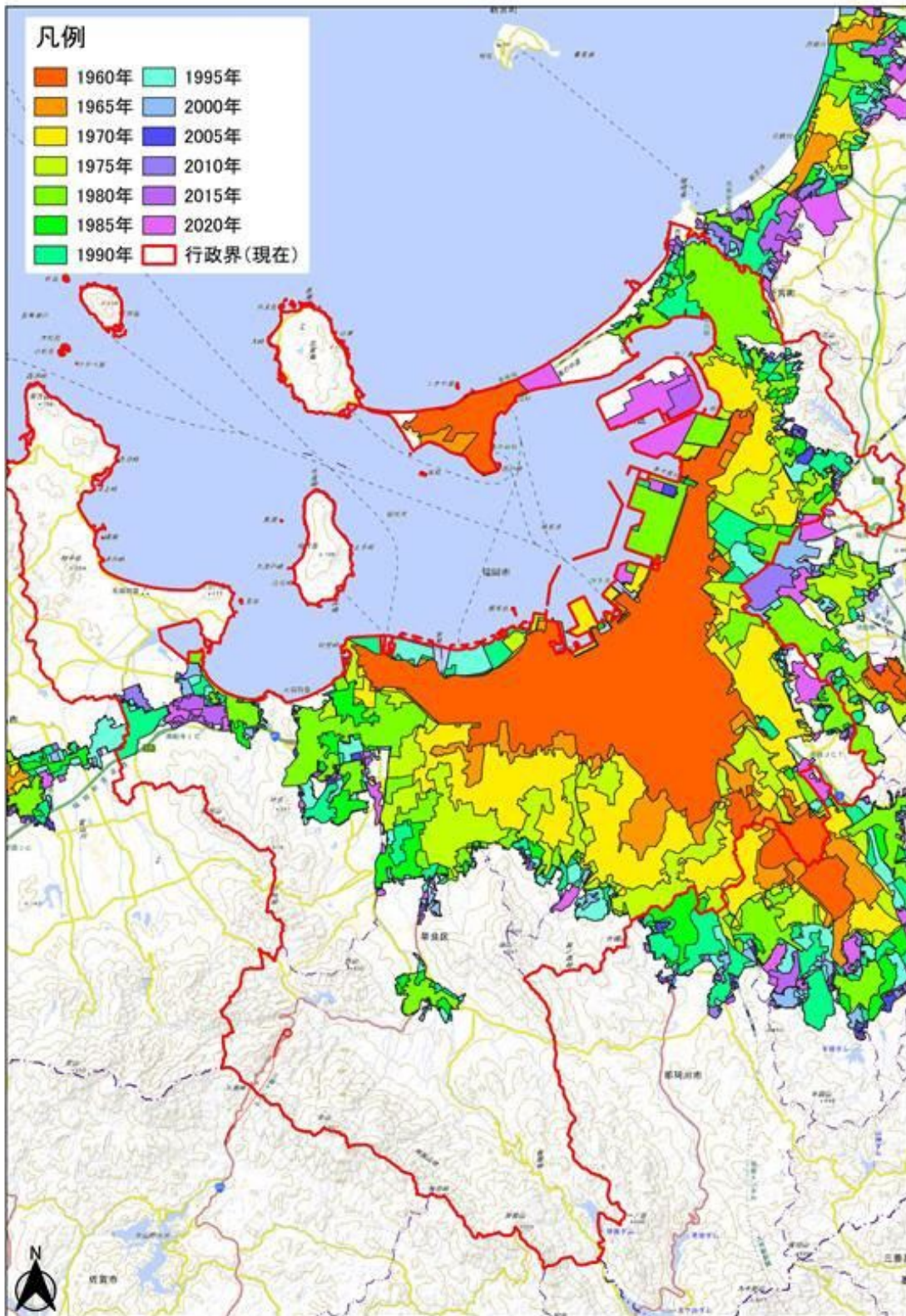
出典:福岡市統計書

図 23 市域面積と人口密度の変遷

## (3) DID

### (4) (人口集中地区) の推移

DID(人口集中地区)は年々拡大し、近年は特に九大学研都市周辺やアイランドシティ周辺への拡大が顕著で、ベッドタウンとしての整備が進んでいる影響と考えられます。

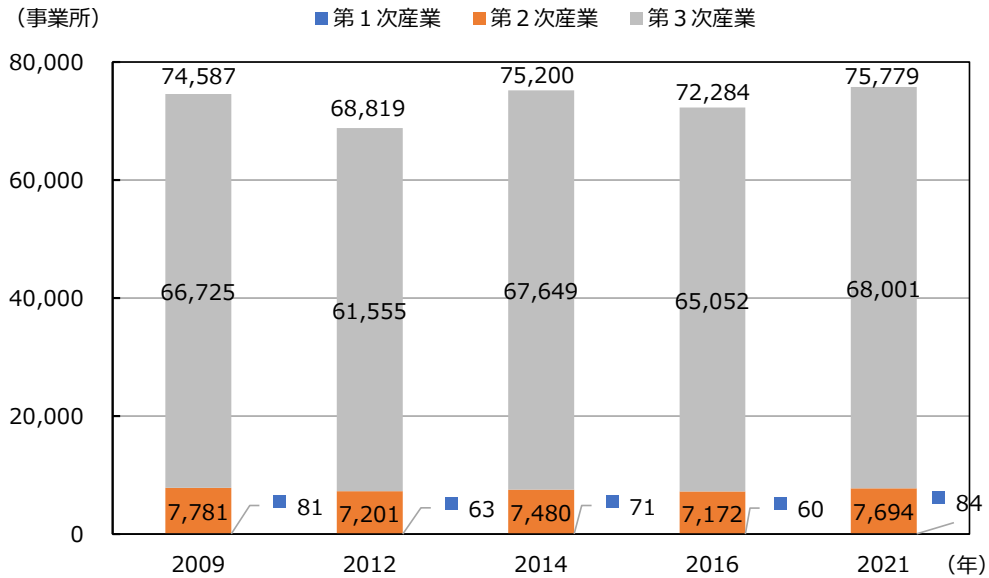


出典:国土交通省「国土数値情報 人口集中地区データ 2020年度版」

図 24 DID の経年変化

## (5) 産業

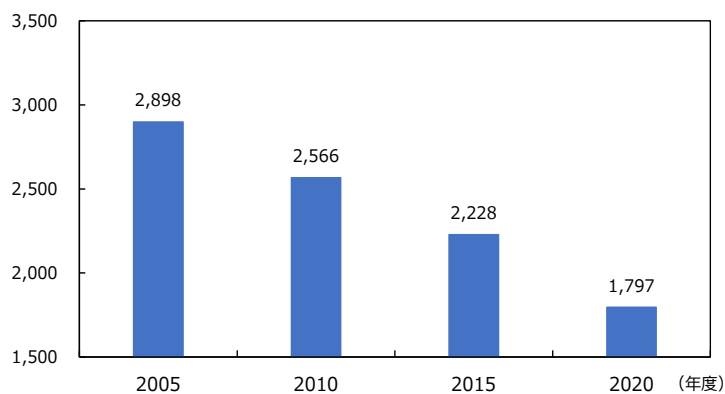
福岡市の2021(令和3)年の産業別事業所数は、第1次産業84事業所、第2次産業7,694事業所、第3次産業68,001事業所です。調査年で多少の増減はあるものの、おおむね同程度で推移しています。



出典:福岡市統計書

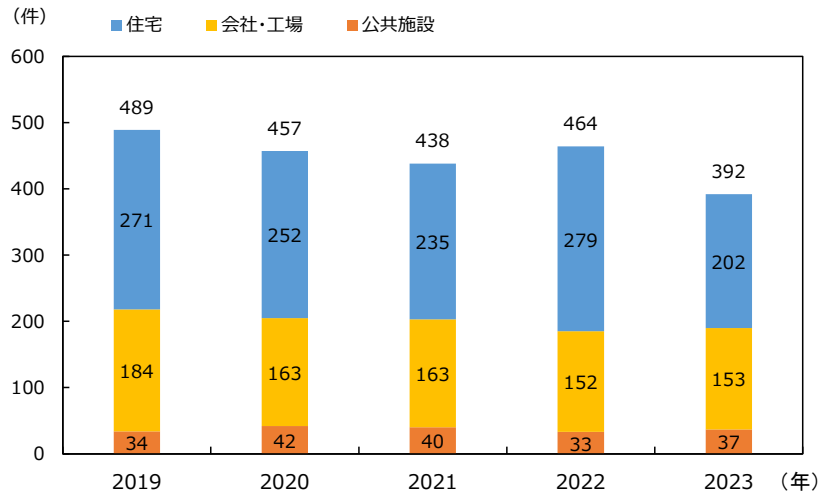
図 25 産業別事業所数の推移

生物多様性と関連が深い第一次産業のうち農業については、都市化の進行や農業従事者の高齢化に伴う市内の農家の廃業などが課題となっています。福岡市内の農家戸数は2020(令和2)年度が1,797戸で、2005(平成17)年度比62%まで減少しました。また、農地転用は毎年400~500件程度行われており、住宅への転用が最も多くなっています。



出典:農林水産省 農林業センサス

図 26 農家戸数の推移



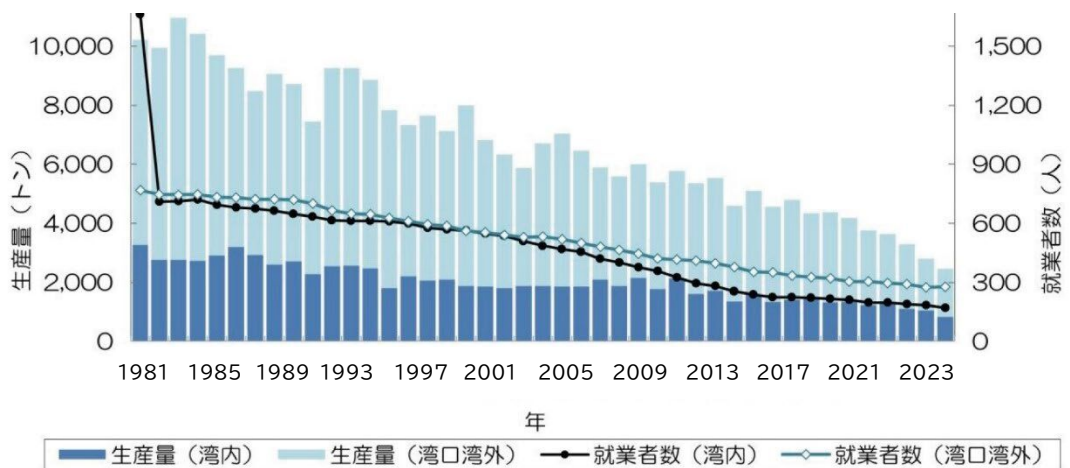
出典：福岡市農林水産統計書 令和 6 年度

図 27 農地転用の推移

また、沿岸漁業の就業者数も減少傾向にあります。2023(令和 5)年では湾内が 169 人、湾口湾外が 277 人となっており、生産量は 2023(令和 5)年において湾内が 832 トン、湾口湾外が 1,632 トンとなっています。

農林水産業などが提供する多面的機能(洪水防止などの国土保全機能、生物多様性等)の重要性が認識されており、機能維持のための取組みが必要です。

また、一次産業の衰退により、福岡市特産の食材・食品の供給が減少することで、これまで育まれてきた食文化の継承が難しくなることが懸念されます。



注 1) 湾口湾外の生産量は小呂島分を含みます。

注 2) 平成 18 年以前の湾内の生産量は、ノリの生産量のみ枚数で集計していたため、枚数を重さに換算して(30 枚を 1kg に換算)、生産量を再集計しています。

福岡市農林水産局のデータをもとに作成

出典：博多湾環境保全計画(第三次)(2025(令和 7)年)

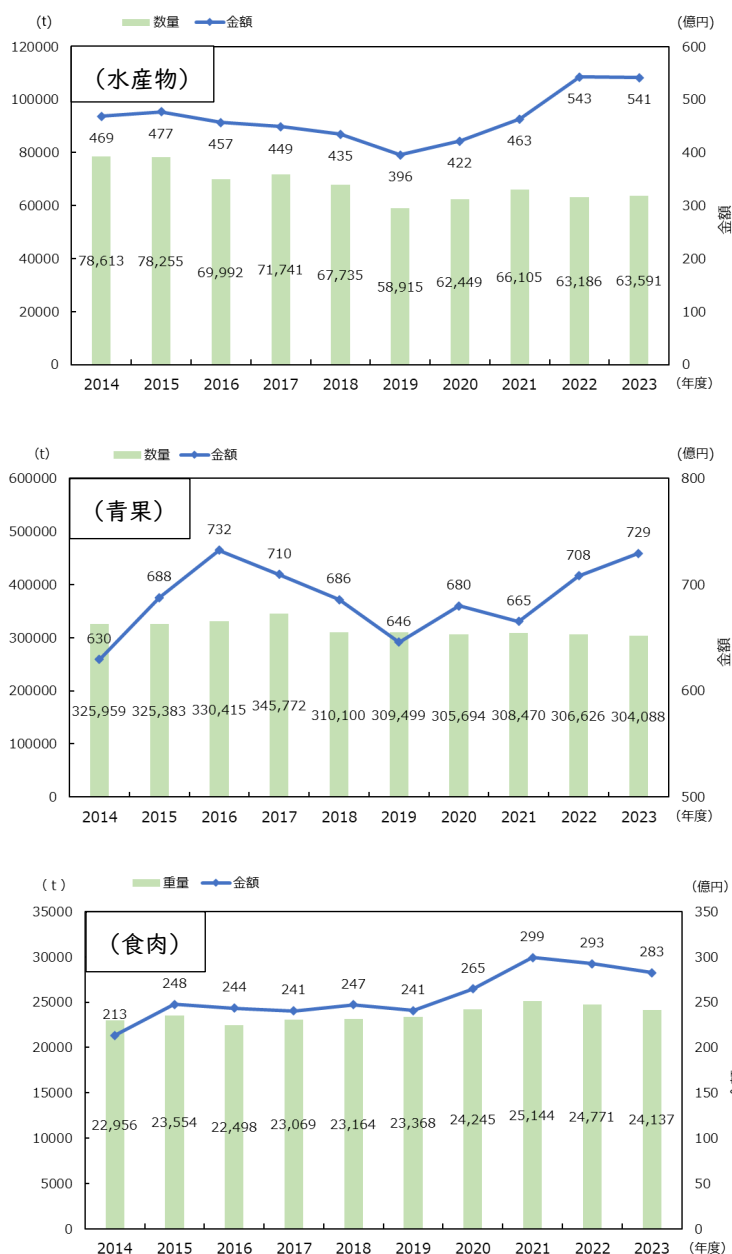
図 28 沿岸漁業の生産量と就業者数の推移

### 3 暮らしの現状

#### (1) 中央卸売市場取扱高

2023(令和5)年度の取扱数量は、水産物が6万4千トン、青果が30万4千トン、食肉は2万4千トンでした。水産物と青果は緩やかな減少傾向にあります。食肉は増加傾向にあります。

その一方で、漁協などが開催する朝市のような水産イベント、農協などが運営する農産物の直売所や地域産品を取り扱う道の駅などは、好評を博しています。その一方で、漁協などが開催する朝市のような水産イベント、農協などが運営する農産物の直売所や地域産品を取り扱う道の駅などは、好評を博しています。

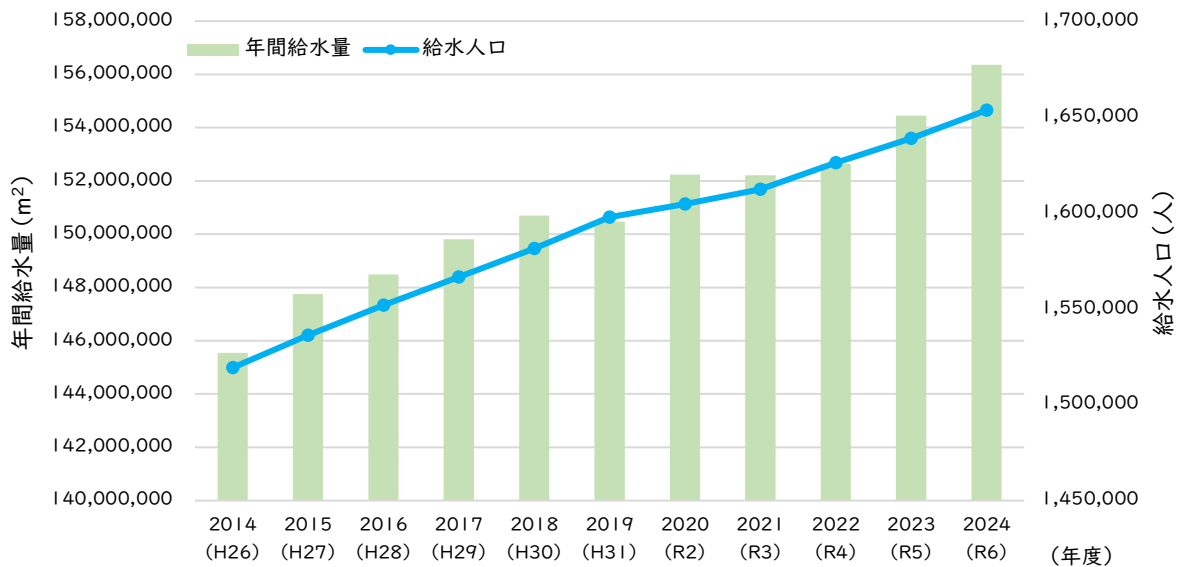


出典:福岡市農林水産局 鮮魚年報、青果年報、食肉年報(平成26年~令和5年)

図 29 年度別中央卸売市場取扱高の推移

## (2) 給水人口、給水普及率

給水人口は年々増加し、2024(令和6)年度には約165万人となり、給水普及率は99.7%程度と高い割合を維持しています。

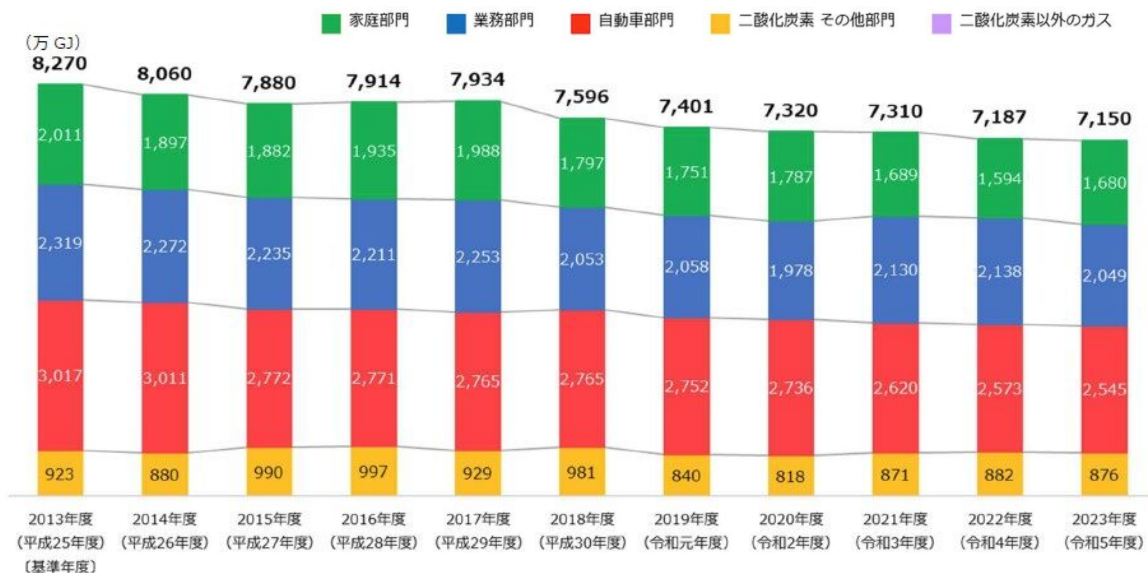


出典:福岡市水道事業統計年報

図 30 年間給水量、給水人口の推移

## (3) エネルギー消費量

エネルギー消費量については、2022(令和4)年度では6,761万GJで、内訳は自動車部門が最大であり、次いで業務部門、家庭部門、二酸化炭素その他部門と続きます。いずれの部門も10年間でなだらかに減少しており、全体では15%程度の削減となりました。



※四捨五入の関係のため、消費量の内訳と総量が一致しない場合がある

※その他:産業部門(農林水産業、建設鉱業、製造業)、運輸部門(鉄道、船舶)、エネルギー転換部門(熱供給事業)

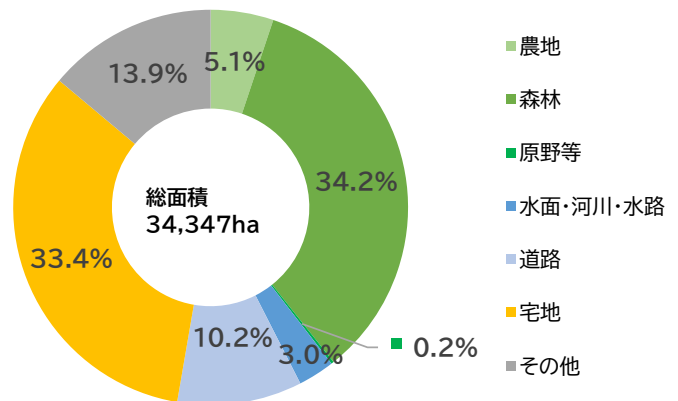
出典:令和7年度版 ふくおかの環境(環境に関する年次報告書)

図 31 エネルギー消費量の推移

## 4 環境の現状

### (1) 土地利用

福岡市の総面積は 34,347ha で、2023 (令和 5) 年度の土地利用割合は森林と宅地がそれぞれ 35%程度、道路 10.2%、農地 5.1%、水面・河川・水路 3.0%の順であり、過去 5 年間で大きな変化は見られません。



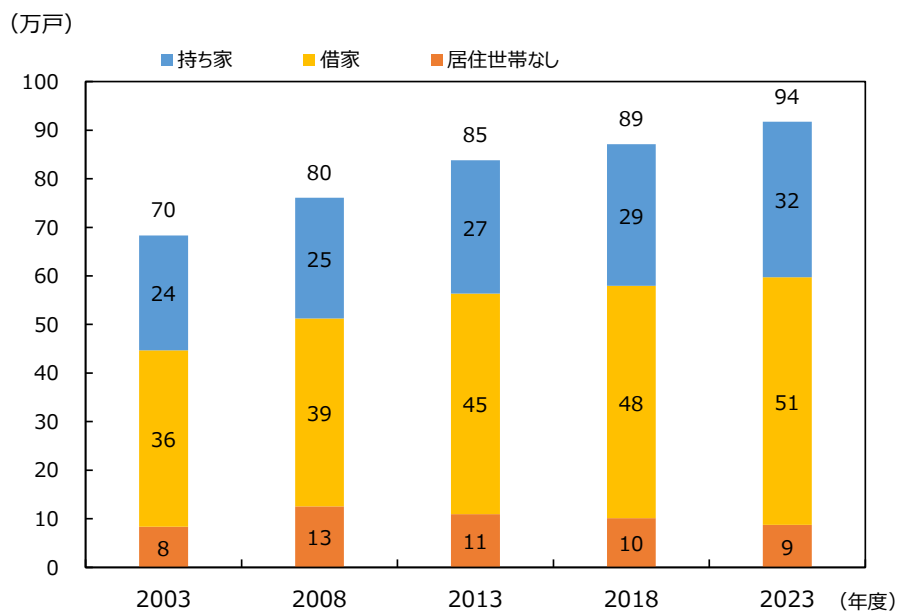
出典：福岡県ホームページ「土地利用現況把握調査」

図 32 土地利用割合(2023 年度)

### (2) 住宅戸数

2023 (令和 5) 年度の住宅戸数は 94 万戸で、借家が 55%程度、持ち家が 35%程度、居住世帯なしが 10%程度です。

居住世帯なしの住宅は、2008 (平成 20) 年度の 13 万戸から 2003 (平成 15) 年度の 9 万戸まで減少し、人口増加により空き家が減少していると考えられます。

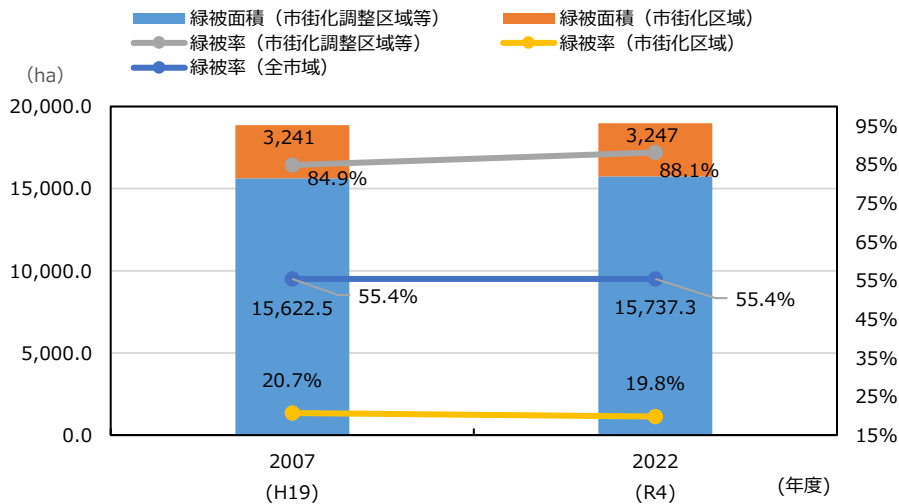


出典：福岡市統計書

図 33 住宅戸数

### (3) 緑被面積、緑被率、森林面積、農地面積

市街化区域の緑被面積は 2022 (令和 4) 年度で 3,247ha、市街化調整区域\*では 15,737 ha で、全市域の緑被率は 55.4%です。2007 (平成 19) 年度と比較すると、市街化調整区域では緑被率が増加していますが、市街化区域では減少しています。



出典:福岡市住宅都市みどり局資料

図 34 緑被面積、緑被率の推移

森林面積は 2025 (令和7) 年度は 11,972ha で、2015 (平成 27) 年度から微増しています。農地面積は 2023 (令和 5) 年は 2,343ha であり、年々減少しています。

緑被率については市街化調整区域では増加していますが、市街化区域では減少しています。臨海部では、自然海岸が減少し、ふ頭や商業地域として利用されています。博多湾は、2005 (平成 17) 年までに約 1,800 ha が埋立地として竣工されました。

このような土地利用の変化が、生物の生息環境の減少に影響していると考えられます。

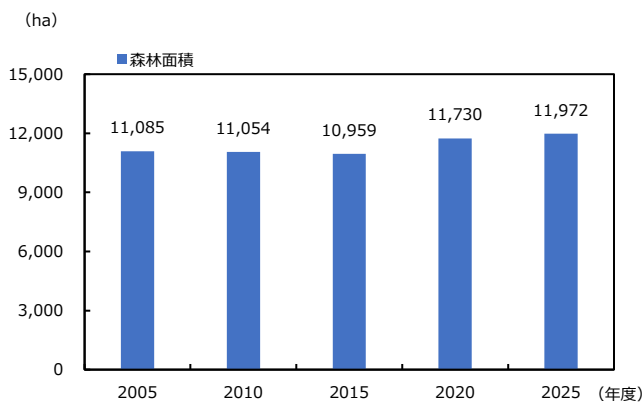


図 35 森林面積の推移

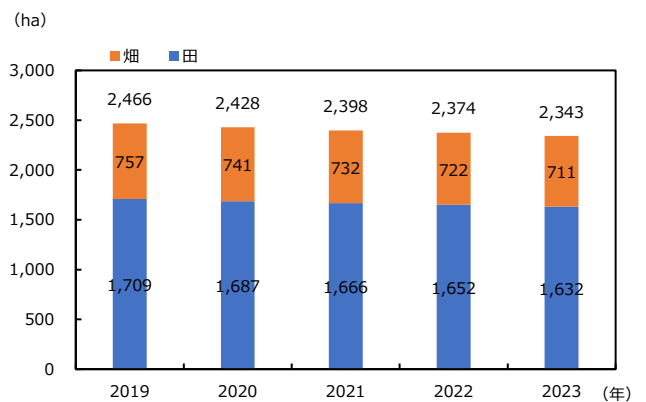
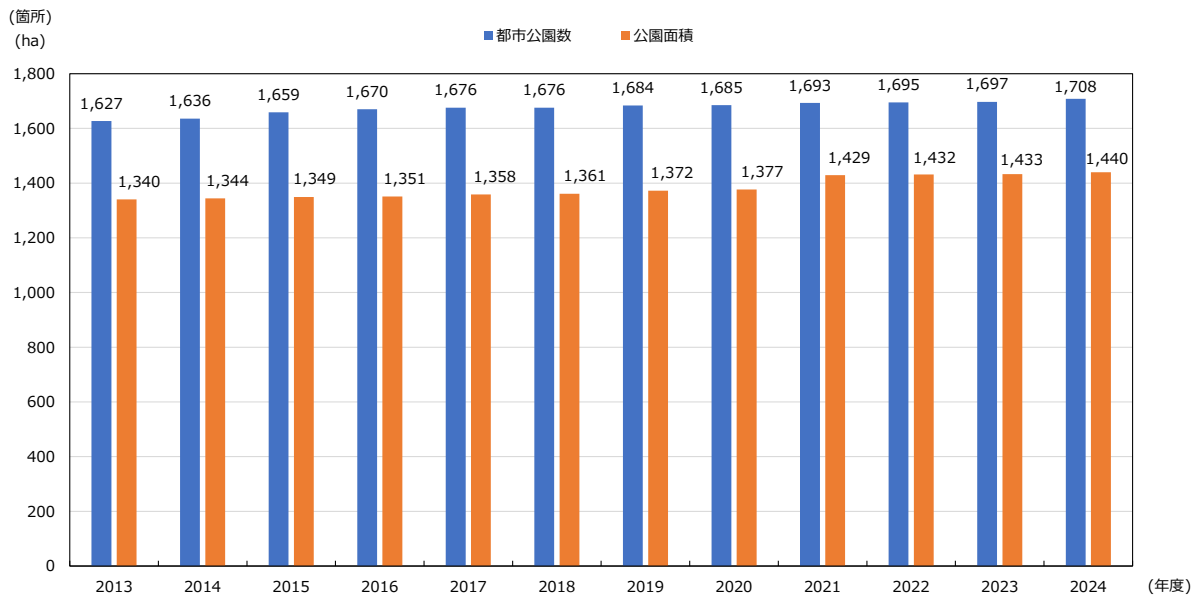


図 36 農地面積の推移

出典:福岡市統計書

#### (4) 都市公園面積・箇所数の推移

2024(令和6)年度時点で1,708箇所の都市公園が存在し、数・面積ともに微増傾向です。

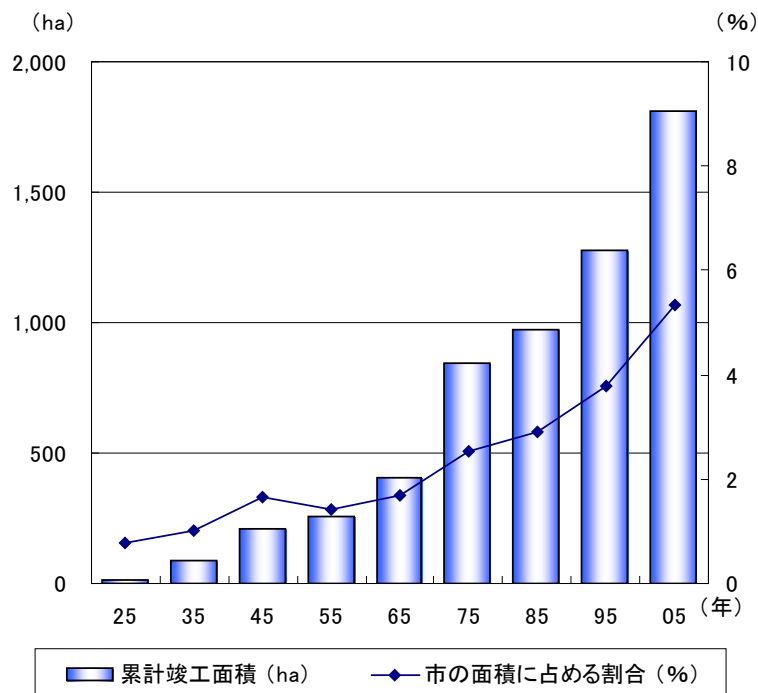


出典:福岡市統計書

図 37 都市公園面積・箇所数の推移

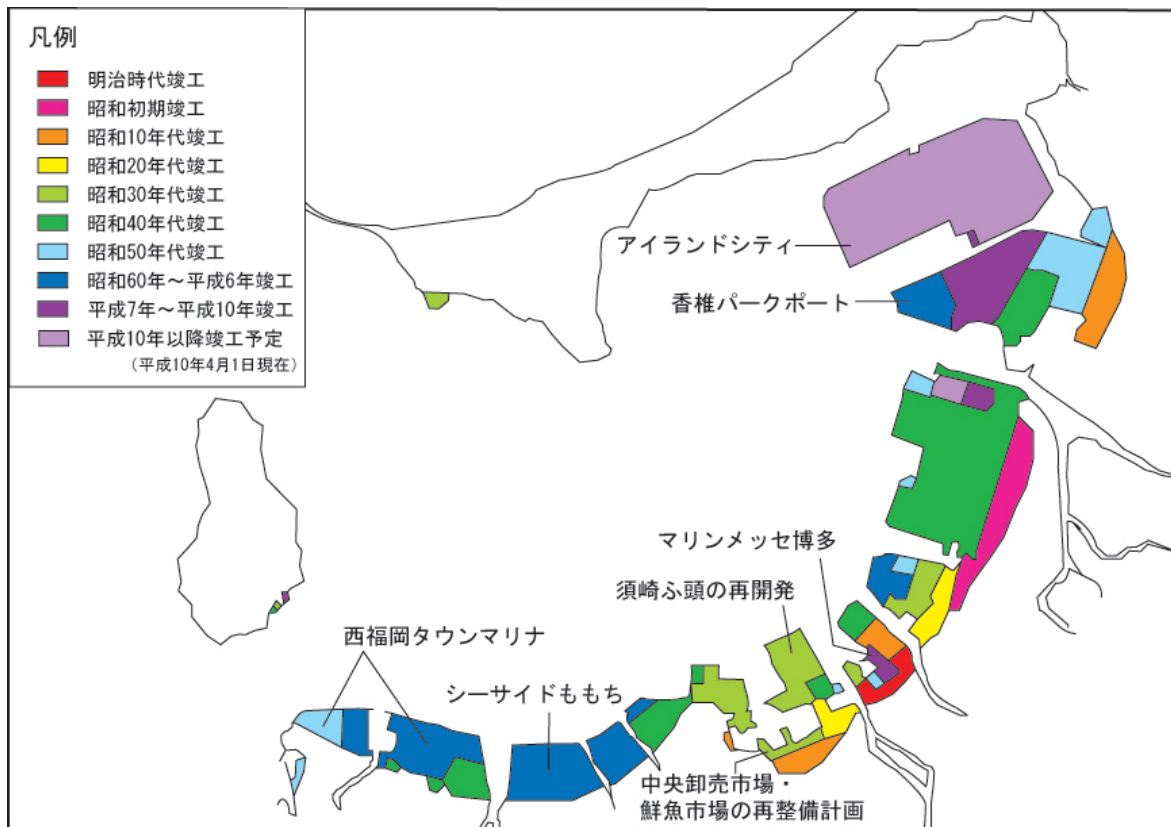
#### (5) 博多湾の埋立地竣工面積の推移

2005(平成17)年までに約1,800haが埋立地として竣工されました。土地利用は、ふ頭や商業地域が主となっています。



出典:福岡市港湾局資料

図 38 博多湾の埋立地竣工面積の推移(明治時代以降)



出典：福岡市港湾局資料

図 39 博多湾の埋立地造成経緯

## (6)水循環と博多湾への流入負荷

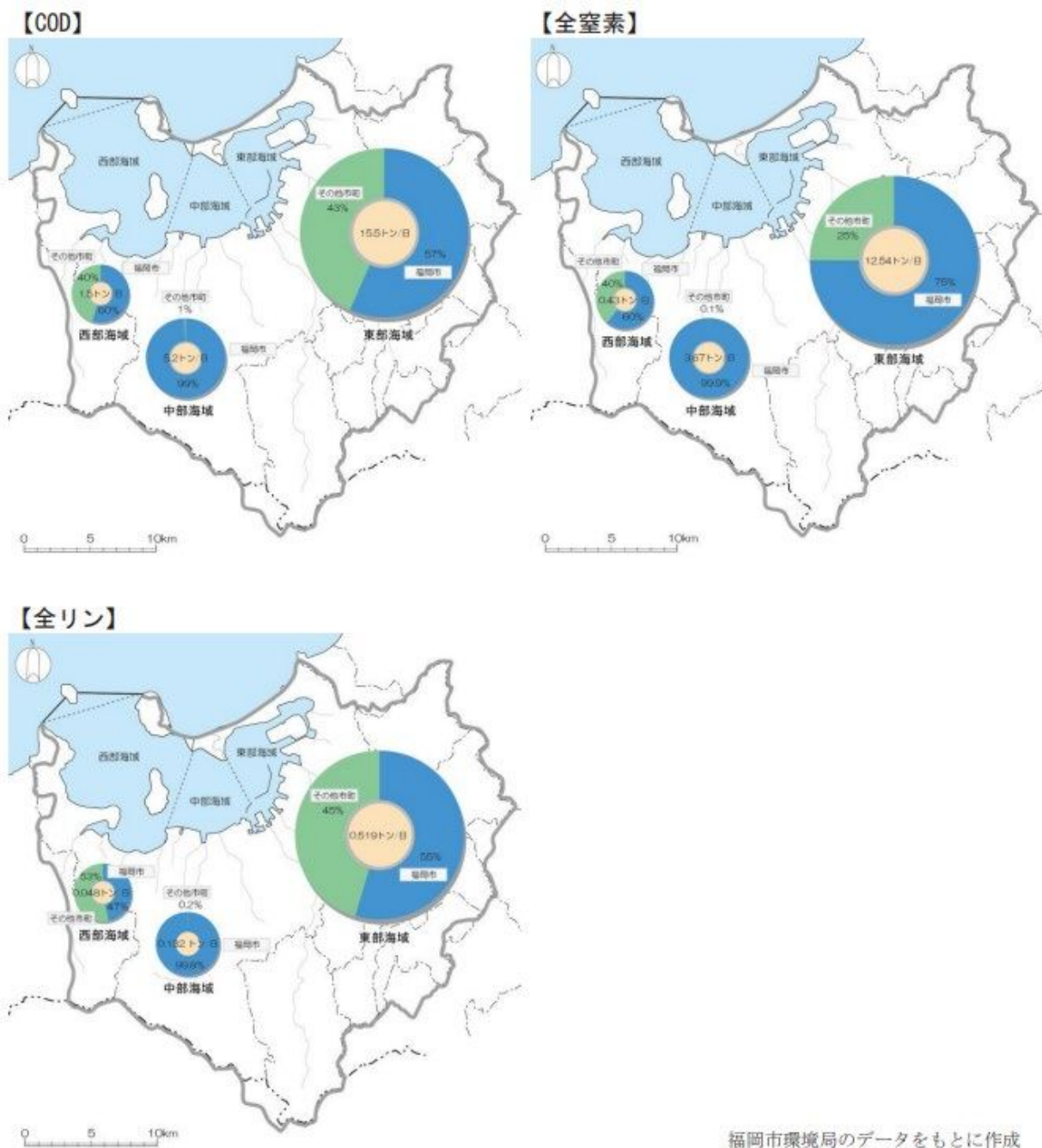
水循環に関しては、現時点では不明な点が多く、そのシステムは解明されていませんが、沿岸域の水循環に関しては、陸域の影響を大きく受けていると考えられます。昭和 30 年代と比較すると、近年では蒸発散量の減少、表面流出量の増加、地下浸透量の減少、河川への地下流出量の減少、上水取水量の増大、下水処理量の増大といった、博多湾とその流域における水収支に変化がみられます<sup>6</sup>。これらにともなって、博多湾に流入する河川の水質、水量や流入負荷\*量などが変化していると考えられます。

流域から博多湾へ流入する負荷量<sup>7</sup>について、令和元年度は有機汚濁の指標となる化学的酸素要求量(COD)が 22.2 トン/日、富栄養化の指標の T-N(全窒素)が 18.9 トン/日、T-P(全リン)が 0.77 トン/日となっています。博多湾流域の人口は増加傾向にありますが、下水道の普及や下水の高度処理の導入などの負荷削減対策により、流入負荷量は抑制されています<sup>8</sup>。

<sup>6</sup> 福岡市総務企画局「福岡市水循環都市づくり基本構想」

<sup>7</sup> 地下水の流入負荷量の推定にあたっては、窒素、リンのみ調査しているため全窒素、全リンのみ算出されています。

<sup>8</sup> 福岡市環境局「博多湾環境保全計画(第三次)」(2025(令和7)年)

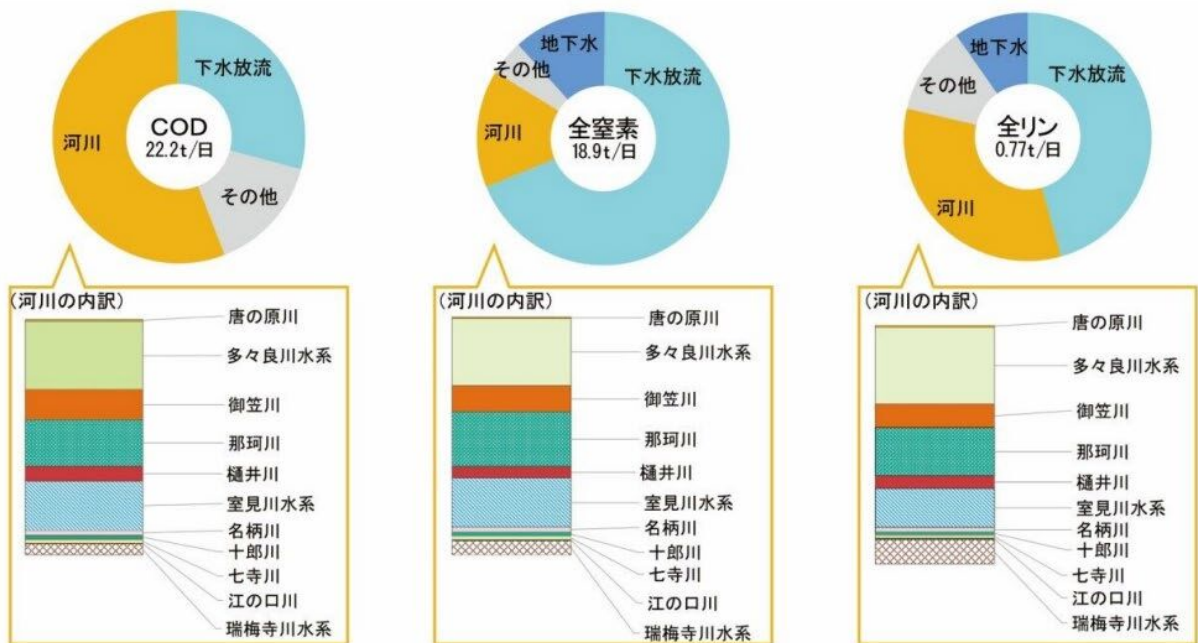


福岡市環境局のデータをもとに作成

出典:博多湾環境保全計画(第三次)(2025(令和7)年)

図 40 海域別流入負荷量(2019(令和元)年度)

流入負荷の内訳は、主に下水処理場の処理水と河川からの流入です。そのうち、下水処理水に由来する流入負荷の割合は、COD が約 30%、全窒素が約 69%、全リンが約 46%です。また、地下水から流入負荷の割合は、全窒素が約 12%、全リンが約 10%です<sup>9</sup>。



令和 5 年度博多湾環境保全対策検討業務委託報告書(福岡市環境局)をもとに作成

出典:博多湾環境保全計画(第三次)(2025(令和 7)年)

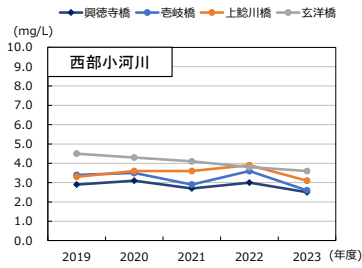
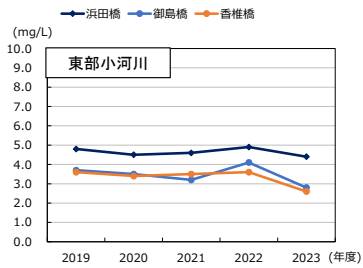
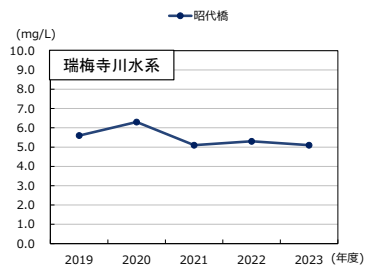
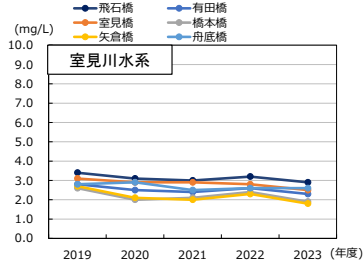
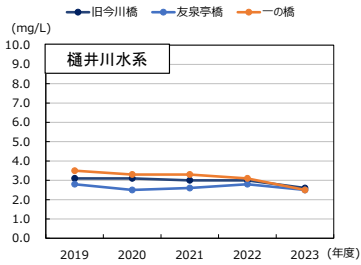
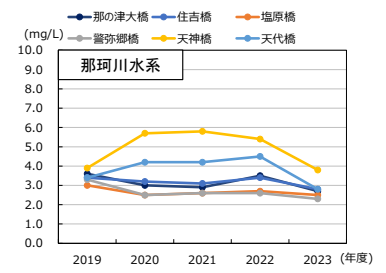
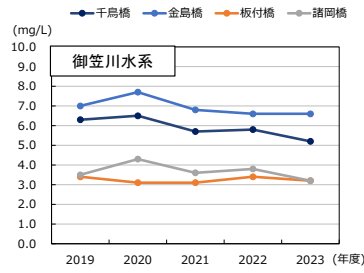
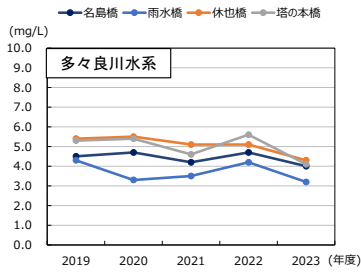
図 41 博多湾への流入負荷量の内訳(2019(令和元)年度)

## (7)河川、海域の水質 (COD)・底質 (COD) の変化

2023(令和 5)年に河川で測定された BOD は、全地点で環境基準を達成していました。

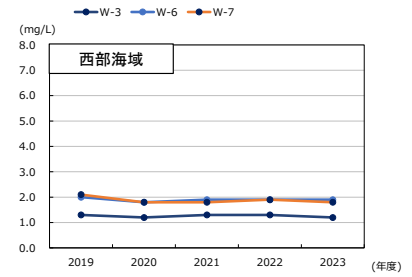
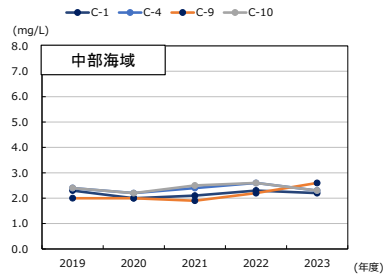
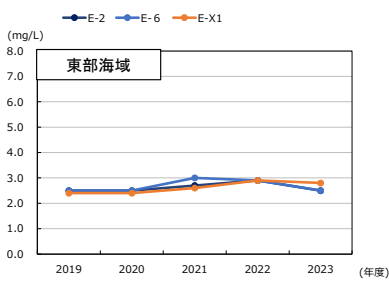
海域で測定された COD は、西部海域の全地点で環境基準を上回っており、東部海域と中部海域でも一部地点では環境基準を上回る結果で、湾全域では 8 地点中 6 地点が環境基準を満たしていませんでした。

<sup>9</sup> 福岡市環境局「博多湾環境保全計画(第三次)」(2025(令和 7)年)



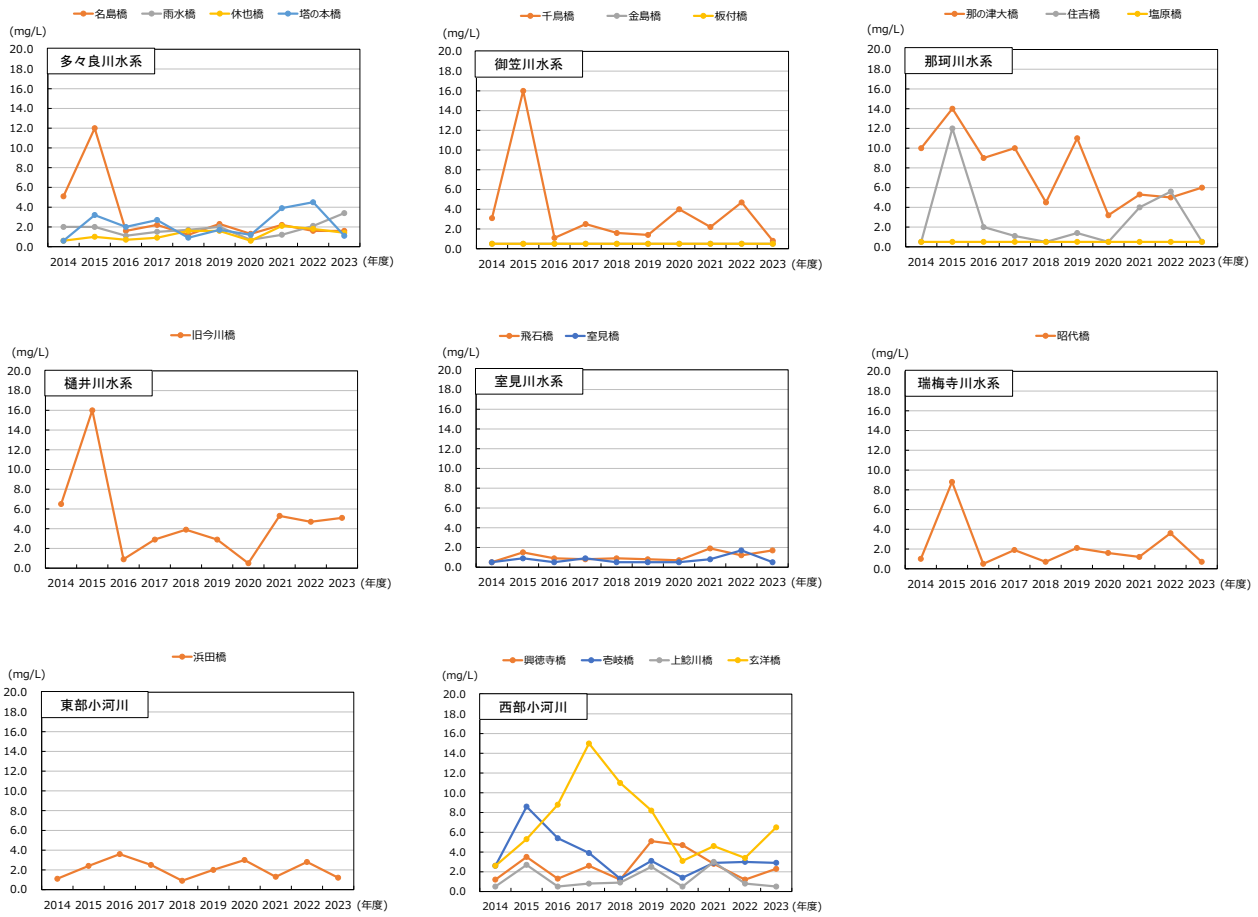
出典:福岡市水質測定結果報告書(2023(令和5)年)

図 42 河川(水質)COD 年平均値の推移



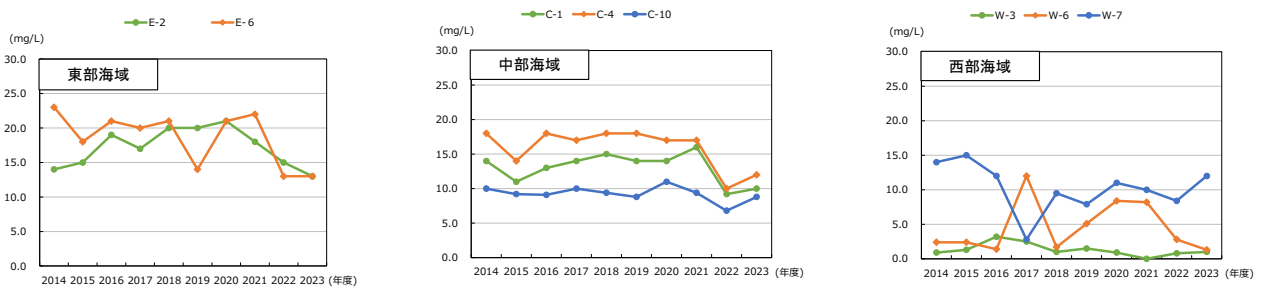
出典:福岡市水質測定結果報告書(2023(令和5)年)

図 43 海域(水質)COD 年平均値の推移



出典:福岡市水質測定結果報告書(2023(令和5)年)

図 44 河川(底質)COD年平均値の推移



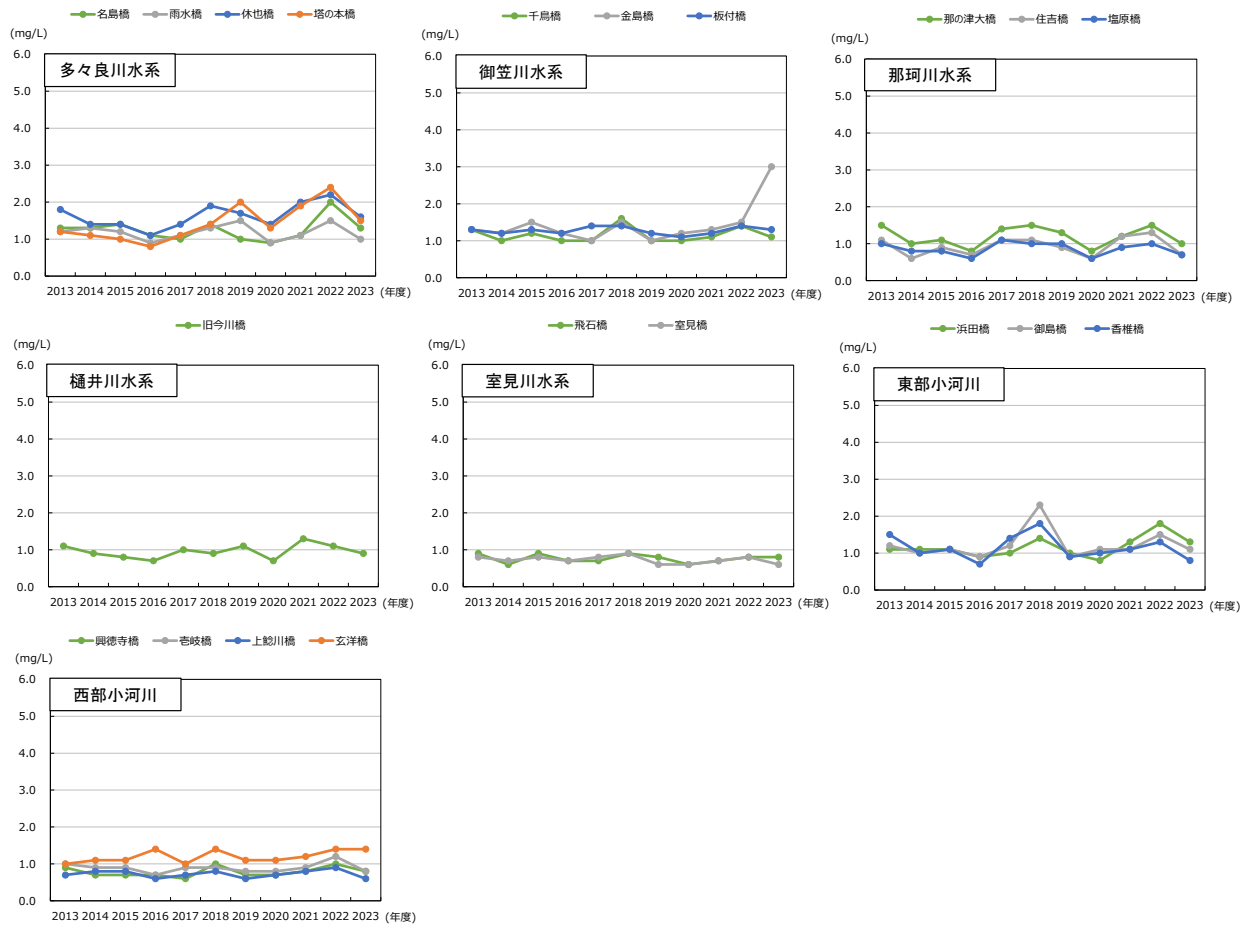
出典:福岡市水質測定結果報告書(2023(令和5)年)

図 45 海域(底質)COD年平均値の推移

表 2 河川 BOD75%値の環境基準達成状況(2023 年度)

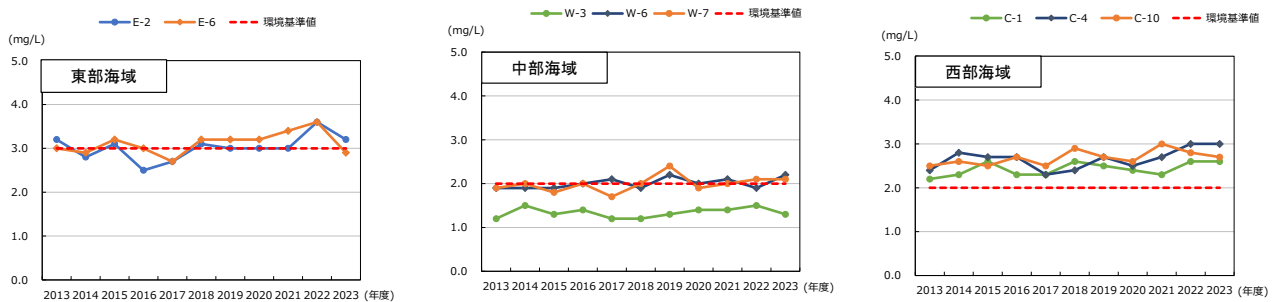
水系	河川名	調査地点	環境基準値 (mg/L)	BOD75%値 (mg/L)	達成状況
唐の原川	唐の原川	浜田橋	5以下	1.4	○
多々良川	多々良川	名島橋	5以下	1.3	○
		雨水橋	2以下	1.1	○
	須恵川	休也橋	5以下	2.0	○
	宇美川	塔の本橋	5以下	1.7	○
御笠川	御笠川	千鳥橋	8以下	1.2	○
		金島橋	8以下	3.4	○
		板付橋	3以下	1.5	○
那珂川	那珂川	那の津大橋	5以下	1.0	○
		住吉橋	3以下	0.8	○
		塩原橋	2以下	0.8	○
樋井川	樋井川	旧今川橋	3以下	0.8	○
室見川	金屑川	飛石橋	5以下	0.8	○
	室見川	室見橋	2以下	0.6	○
名柄川	名柄川	興徳寺橋	5以下	0.7	○
十郎川	十郎川	壱岐橋	5以下	0.9	○
七寺川	七寺川	上鯰川橋	5以下	0.6	○
江の口川	江の口川	玄洋橋	5以下	1.3	○
瑞梅寺川	瑞梅寺川	昭代橋	2以下	1.6	○

出典:環境監視の結果(2024(令和6)年)



出典:環境監視の結果(2024(令和6)年)

図 46 BOD 年平均値の推移



出典:環境監視の結果(2024(令和6)年)

図 47 COD75%値の推移

### (8) 日平均気温の平年値の推移

福岡市の 30 年間(1974~2023(平成 6~令和 5)年)で見ると、年平均気温は上昇傾向にあります。また、2024(令和 6)年は猛暑日が 39 日あり、猛暑日の日数も増加傾向にあります。気温上昇は第一次産業や市民の健康に影響を与えるだけでなく、動植物の分布にも影響を及ぼす可能性があります。

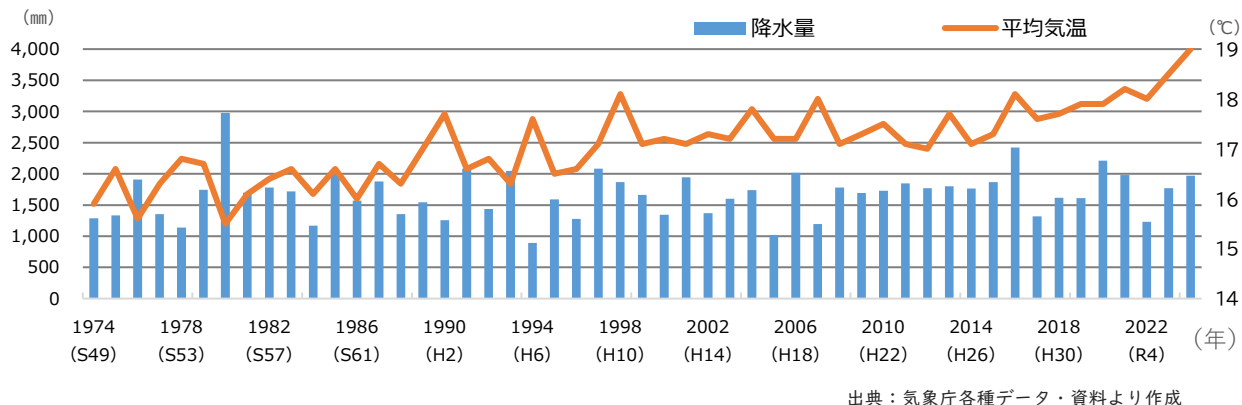


図 48 福岡市の年別降水量及び気温の推移

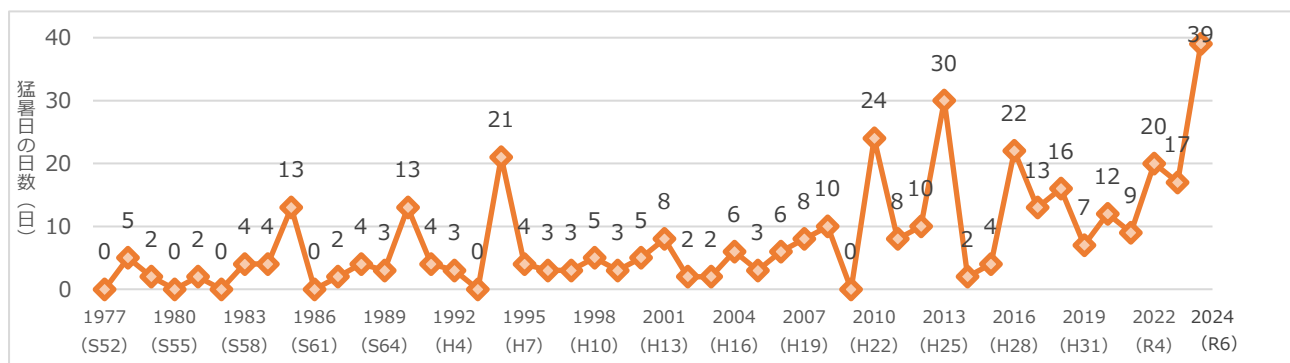
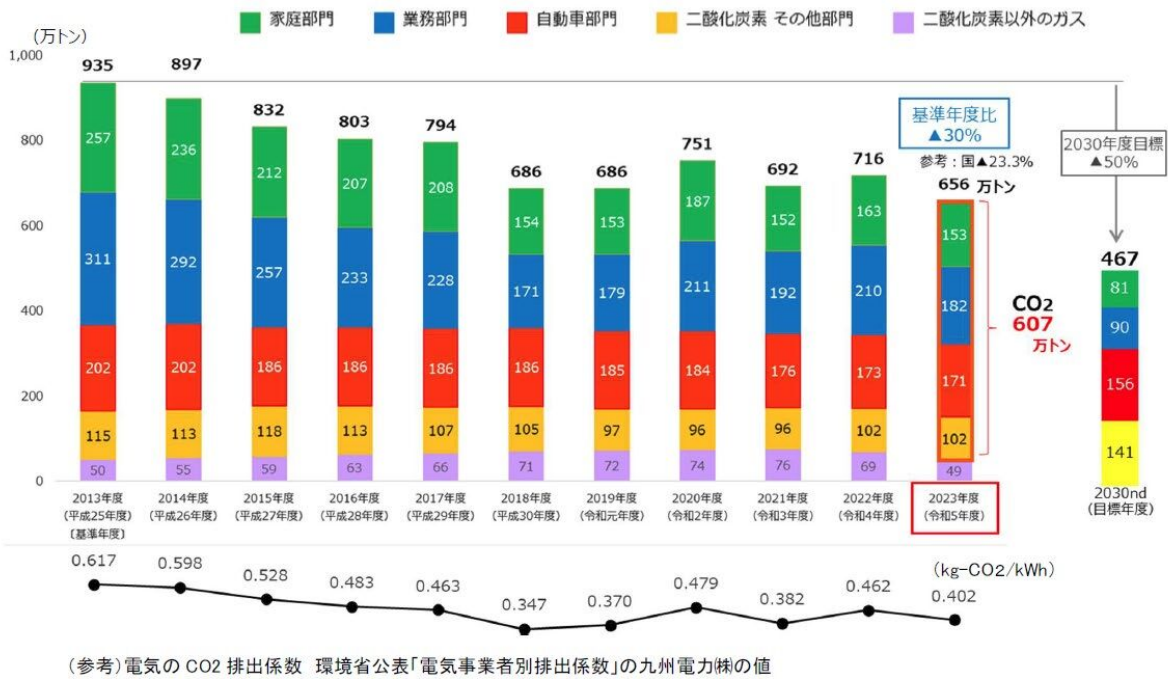


図 49 福岡市の猛暑日の推移

### (9) 温室効果ガス排出量

市内の温室効果ガス排出量は減少傾向にあり、2023(令和 5)年度の温室効果ガス排出量は推計 656 万トンで、基準年度(2013(平成 25)年度)に比べて 30%減少しています。

部門別では家庭、業務、自動車部門で、CO<sub>2</sub> 排出量の 83%を占めます。



出典:令和7年度版 ふくおかの環境 (環境に関する年次報告書)

図 50 温室効果ガス排出量(二酸化炭素換算)の推移

### (10) 外来種の分布状況

本市内で確認されている特定外来生物は20種です。

本市内においては、河川やため池の水域を中心としてアライグマ、ウシガエル、オオクチバス、オオフサモ等が確認され、臨海部の埋立地や都市域においてセアカゴケグモ、樹林地でアライグマやソウシチョウ等が確認されています。

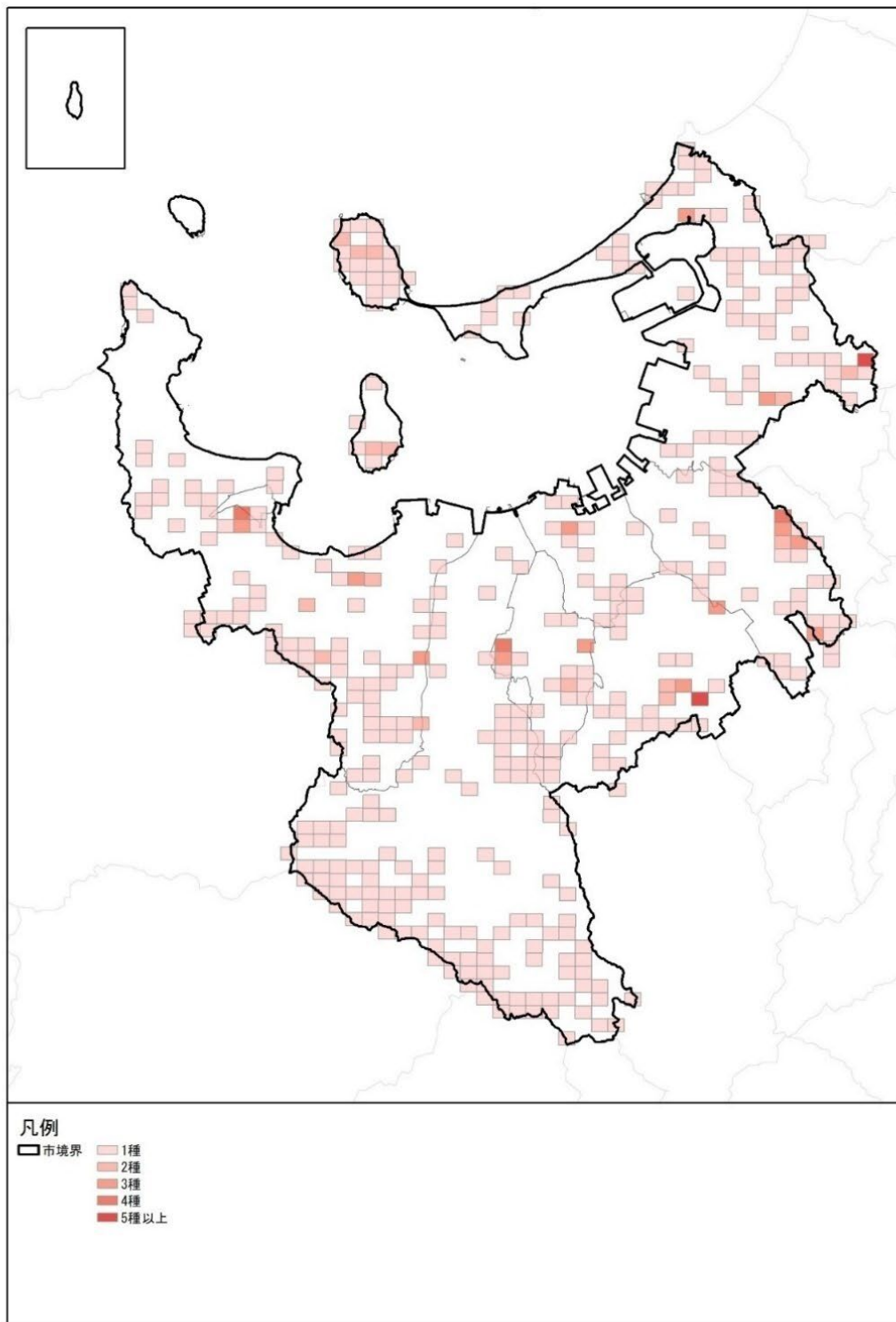
博多区の東平尾公園や南区の野多目池や那珂川、城南区の西南杜の湖畔公園など、市街地に近い水域付近で多くの種が確認されています。

表 3 福岡市内で確認されている特定外来生物

分類群	該当種
哺乳類	アライグマ
鳥類	ガビチョウ、ソウシチョウ
両生類	ウシガエル
魚類	オオクチバス、ブルーギル、カダヤシ
昆虫類	(ヒアリ)、(アカカミアリ)、(ツマアカスズメバチ)
クモ類等	セアカゴケグモ、ハイロゴケグモ、(キョクトウサソリ科)
植物	オオキンケイギク、ブラジルチドメグサ、オオフサモ、(アレチウリ)、ナルトサワギク、ボタンウキクサ、(ナガエツルノゲイトウ)

※ ( ) 内の種は市内で確認はされているが、定着していない種  
 ※条件付特定外来生物は除く

出典:令和6年度福岡市自然共生サイト認定支援調査等業務報告書  
 平成19年度自然環境調査(外来生物の生息状況調査)委託報告書  
 平成20年度自然環境調査(外来生物の生息状況調査)委託報告書  
 平成25年度自然環境調査(外来生物の生息状況調査)委託報告書  
 平成31年度自然環境調査(昆虫類)委託報告書  
 令和2年度自然環境調査(鳥類)委託報告書  
 令和3年度自然環境調査(水生生物)委託報告書



出典:令和6年度福岡市自然共生サイト認定支援調査等業務報告書  
 平成19年度自然環境調査(外来生物の生息状況調査)委託  
 平成20年度自然環境調査(外来生物の生息状況調査)委託

図 51 特定外来生物の確認状況

## (11) 福岡市内に定着しているもしくは定着リスクの高い外来種

すでに定着していることが確認されている特定外来生物は 14 種、今後定着まん延の危険性のある外来生物は 22 種以上です。

河川やため池の水域を中心としてオオフサモ、アカミミガメ、カダヤシ、水田や用水路等ではスクミリンゴガイ、海岸ではツルニチニチソウが確認されています。

建築資材等にヒアリやアカカミアリ、土砂や植木の運搬などに付随してヤンバルトサカヤステの混入が確認されています。

ヒアリ、アカカミアリ等のヒアリ類については、2023(令和 5)年 4 月 1 日から「要緊急対処特定外来生物」として、通関後の検査や消毒・廃棄命令等、検査中の対象物品等の移動禁止といったより強い規制の適用が可能となりました。

表 4 福岡市内に定着しており、分布を拡げないよう注意すべき種と対応方法

主な侵入経路	注意すべき種	市内での現況と主な対応方法
物資の輸送、土砂の運搬等に伴い侵入、分布を拡大させる恐れがあるもの	ブラジルチドメグサ(総_緊、特)	市内では瑞梅寺川水系のため池、那珂川で確認されている。 ちぎれた植物体が岸辺に定着して分布を拡げるなど、生育旺盛な水生植物である。デンジソウ等の希少植物と競合する可能性がある。 除草の際に下流に流さない、浚渫土砂を系外に持ち出さないなどの注意が必要。
	オオフサモ(総_緊、特)	市内では西区のため池、那珂川水系で確認されている。 生育旺盛で冬場でも地上部が枯れることなく越冬することから、筑後川水系では水路の水流阻害、希少な水生植物との競合が問題となっている。 除草の際に下流に流さない、浚渫土砂を系外に持ち出さないなどの注意が必要。
	ボタンウキクサ(総_緊、特)	市内のため池で確認されているが、継続して発生しているかどうかの記録はない。 浮遊性の水草で水面を覆い尽くすことから、他の水生植物の生育を阻害することが懸念されている。 ・種子からの発芽の他、根茎などからの生育も旺盛なことから、除草の際には下流に流さない、浚渫土砂を系外に持ち出さないなどの注意が必要。
	ホテイアオイ(総_重)	市内では西区のため池で確認されている。 浮遊性の水草で水面を覆い尽くすことから、他の水生植物の生育を阻害することが懸念されている。 栄養生殖による生育が旺盛なことから、除草の際には下流に流さない、浚渫土砂を系外に持ち出さないなどの注意が必要。
	ナガエツルノゲイトウ(総_緊、特)	市内では東区の河川で確認されている。 茎切片による栄養繁殖が極めて旺盛で、日当たりのよい肥沃な条件下では急激に増殖することから、在来種との競合、水生動物の生息環境悪化が懸念される。 除草の際に下流に流さない、浚渫土砂を系外に持ち出さないなどの注意が必要。
修景・緑化の目的で導入(侵入)する可能性のあるもの	アカミミガメ(総_緊、条特)	市内の河川、ため池などの水域に広く分布する。 雑食性で、在来の淡水ガメの卵を捕食するほか、佐賀市で希少な水生植物を食害した例も報告されている。 以前は愛玩用、観賞用として販売されていたが、2023(令和 5)年 6 月 1 日から条件付特定外来生物として、販売や頒布の規制が開始された。 ビオトープ整備やため池、河川等の管理において、生息が確認された場合は積極的な防除を進めることが望ましい。

主な侵入経路	注意すべき種	市内での現況と主な対応方法
修景・緑化の目的で導入(侵入)する可能性のあるもの	カダヤシ(総_重、特)	市内では東区五丁川、西区のため池などで分布が確認されている。 本種の生息環境が在来のメダカの生息環境と重なることから、在来種を駆逐することが懸念される。 ポウフラ退治を主目的として導入された経緯がある。ビオトープ整備の際には積極的な防除を進めることが望ましい。
	スクミリングガイ <ジャンボタニシ>(総_重)	市内では各地の水田や用水路等でみられる。水域より高い位置に赤い卵塊を産み付ける。 田植後のイネを食害するほか、広東住血吸虫の中間宿主となる。 水草や雑草を食べることから、水槽や池などの水辺の管理に有用な生物として販売されるが、導入は避け、積極的な防除に努めることが望ましい。
	ツルニチニチソウ(総_重)	市内では海岸に成立する松林の林床に群落を形成する。 西区、大原海岸ではツルニチニチソウ群落に被覆され、カワラサイコ等希少植物が減少している。 カバープランツとして活用されることが多いが、生物多様性保全上重要な地域での使用は避けることが望ましい。
	オノウシノケグサ <トールフェスク、ケンタッキー31フェスク>(産)	市内では市街地、河川敷、農地、道路の法面などに広く分布する。 生育は旺盛で、その他植物の侵入を阻害することから、在来種との競合が懸念される。また、花粉症の原因とされている。 牧草、砂防用、法面緑化用として導入されることが多いが、生物多様性保全上重要な地域へ侵入する恐れのある地域では使用を避けることが望ましい。
	ハリエンジュ<ニセアカシア>(産)	市内各地で確認されている。 種子が風や水に運ばれて河原や海岸に侵入、在来種と競合、駆逐する。 庭木や街路樹、養蜂の蜜源植物等に利用する。生物多様性保全上、重要な地域へ侵入する恐れのある地域では使用を避けることが望ましい。

※代表的な生物種の項の( )内は“我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト”のカテゴリー区分を示す。

- ・総\_緊:総合対策外来種(緊急対策外来種)
- ・総\_重:総合対策外来種(重点対策外来種)
- ・産:産業管理外来種
- ・特:特定外来生物
- ・条特:条件付特定外来生物

出典:福岡市環境配慮指針(更新日:2025年11月20日)

表 5 福岡市に今後定着まん延の危険性のある注意すべき種と対応方法

主な侵入経路		注意すべき種	主な対応方法
非意図的導入	建築資材等からの混入	ヒアリ(予_定着、特) コカミアリ(予_定着、特) アルゼンチンアリ(総_緊、特) アカカミアリ(総_緊、特) ツマアカスズメバチ(総_緊、特) ジュウサンボシゴケグモ(予_定着、特) など	輸入物資に付着、混入している特定外来生物等の消毒方法の基準(環境省、農林水産省策定)に基づき、主務大臣より輸入者へ対し消毒等の措置を行うよう指示されることがある。 特にヒアリ、アカカミアリ等のヒアリ類については、2023(令和5)年4月1日から「要緊急対処特定外来生物」として、通関後の検査や消毒・廃棄命令等、検査中の対象物品等の移動禁止といったより強い規制の適用が可能となった。
	土砂や植木の運搬などに付随して混入	ヤンバルトサカヤステ(総_その他) マダラコウラナメクジ(総_その他) など	埋土種子や植物体が含まれている可能性のある土砂は事業区域内に持ち込まない。 外来生物混入の可能性のある土砂や植木の根鉢は事業区域内に持ち込まない。
意図的導入	修景・緑化の目的で導入する可能性のあるもの	園芸スイレン(総_重) メラノキシロンアカシア<ブラックウッドアカシア>(総_重) 外来ノアサガオ類(総_重) シチヘンゲ<ランタナ>(総_重) フサフジウツギ(総_重) ヒロハオモダカ(総_重) コカナダモ(総_重) アマゾントチカガミ(総_重) 外来セキショウモ(総_重) アツバキミガヨラン(総_重) ナガバオモダカ<ジャイアントサジタリア>(総_重) フヨウ(総_その他) カッコウアザミ(総_その他) 外来クサフジ類(産) など	外来種導入に先立って、生態系への影響がより小さく、同等程度の社会経済的効果の得られる代替措置がないか検討する。 生物多様性保全上の重要地域、特殊な立地環境に侵入おそれのある場所には持ち込まない。 栽培中止の場合には適切な処置を行う。

※代表的な生物種の項の( )内は“我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト”のカテゴリー区分を示す。

- ・予\_定着:定着予防外来種(その他の定着予防外来種)
- ・総\_緊:総合対策外来種(緊急対策外来種)
- ・総\_重:総合対策外来種(重点対策外来種)
- ・総\_その他:総合対策外来種(その他の総合対策外来種)
- ・産:産業管理外来種
- ・特:特定外来生物

出典:福岡市環境配慮指針(更新日:2025年11月20日)

## (12) 市内各河川における外来種の確認種数の変化

市内の各河川において、近年、数種の外来種が確認されるようになっており、特に出現頻度が高い外来生物はブルーギル、オオクチバスでした。

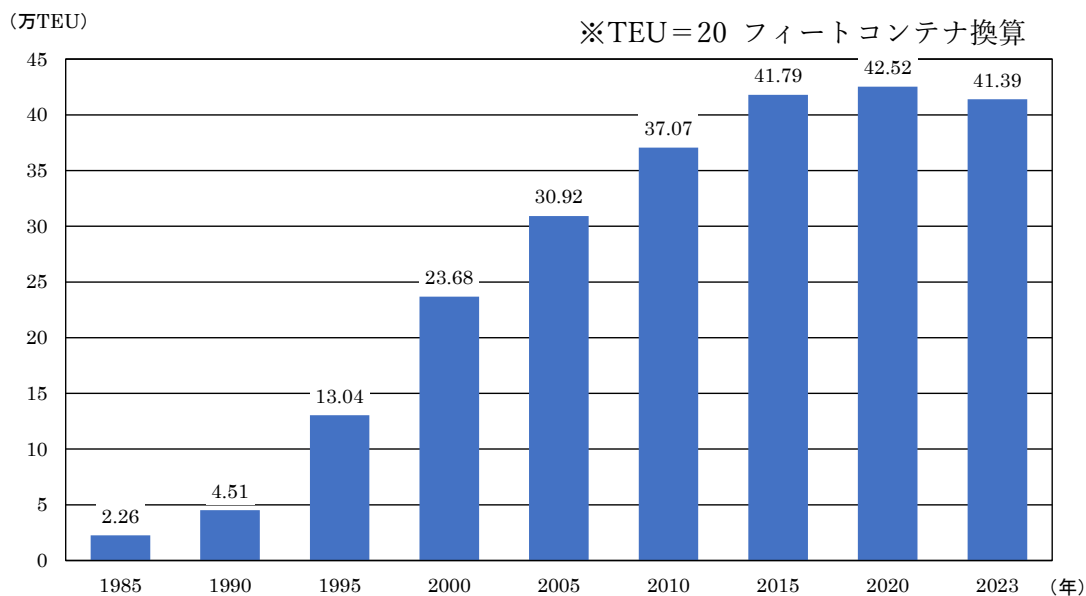
国際港湾である博多港があり、アジアを中心とした国際貨物量が大幅に増加しているため、海外からの外来種侵入リスクは高いものと考えられます。

全国的にも外来種の増加は課題になっており、福岡市も外来種の増加が懸念されます。

表 6 市内各河川における外来種の確認種数の変化

河川	平成 18年	平成 23年	平成 28年	令和 3年	確認された外来種
多々良川	3	0	0	4	カダヤシ、ブルーギル、オオクチバス、カムルチー
御笠川	4	0	3	0	ゲンゴウウツナ、カダヤシ、ブルーギル、オオクチバス
那珂川	2	5	1	1	ゲンゴウウツナ、タイリクバラタナゴ、カダヤシ、ブルーギル、オオクチバス
樋井川	2	2	1	2	ゲンゴウウツナ、カダヤシ、ブルーギル、オオクチバス
金屑川	1	0	0	1	グッピー、オオクチバス
室見川	0	3	0	1	ブルーギル、オオクチバス、カムルチー
瑞梅寺川	2	0	1	2	ゲンゴウウツナ、ブルーギル、オオクチバス

出典：令和3年度自然環境調査（水生生物）委託報告書



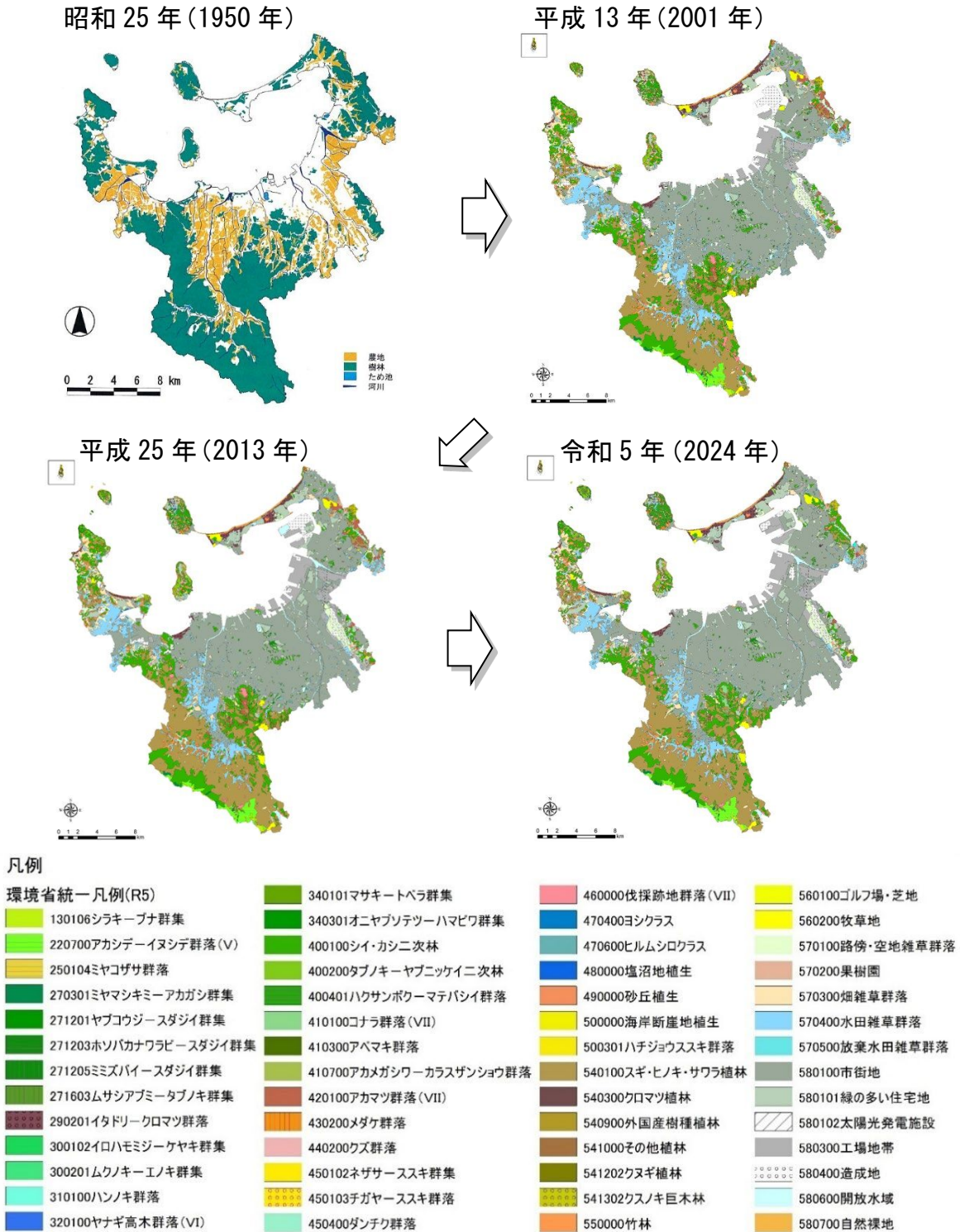
出典：博多港統計年報（2023（令和5）年）

図 52 博多港の国際海上コンテナ取扱個数(輸入)

## 5 生物多様性の現状

### (1) 樹林地、農地、水辺の分布状況の推移

樹林地、農地、水辺の分布状況の変遷をみると、1950（昭和 25）年頃と比較して、樹林地は市内南部、農地は市内東部で減少が顕著です。2001（平成 13）年には市街地にわずかに点在していた農地がさらに減少し、ほとんど見られなくなりました。



出典：令和 5 年度自然環境調査（植生及び貴重植物）委託報告書（2024（令和 6）年）

図 53 福岡市の植生分布

## (2) 植生の遷移（竹林の分布拡大）の状況

植生をみると、各群落ともある程度の増減が確認されましたが、特に松くい虫被害による被害を受けたアカマツ群落の減少が顕著であり、これらはシイ・カシ二次林またはコナラ林に変化したと推察されます。また、竹林の増加率は 135.7%であり、徐々に拡大しているものと考えられます。

表 7 植生面積の変化（平成 20 年度から令和 5 年度）

群落名	平成20年度		平成25年度		平成30年度		令和5年度		増減面積 (ha)	面積比
	面積(ha)	割合	面積(ha)	割合	面積(ha)	割合	面積(ha)	割合		
シラキープナ群落	64.9	0.2%	64.5	0.2%	64.5	0.2%	64.5	0.2%	-0.4	99.4%
アカシデーイヌシデ群落 (V)	383.9	1.1%	381.1	1.1%	381.1	1.1%	381.1	1.1%	-2.8	99.3%
ミヤコザサ群落	4.8	0.0%	4.8	0.0%	4.8	0.0%	4.8	0.0%	0.0	100.0%
ミヤマシキミニアカガシ群落	51.3	0.2%	51.3	0.2%	51.3	0.1%	51.3	0.1%	0.0	100.0%
ヤブコウジースダジイ群落	38.7	0.1%	36.7	0.1%	36.7	0.1%	36.7	0.1%	-2.0	94.8%
ホソバカナワラビースダジイ群落	7.5	0.0%	7.5	0.0%	6.9	0.0%	6.9	0.0%	-0.6	92.0%
ミミズバイースダジイ群落	32.5	0.1%	29.9	0.1%	29.9	0.1%	29.3	0.1%	-3.2	90.2%
ムサシアブミータブノキ群落	98.8	0.3%	98.8	0.3%	96.2	0.3%	95.4	0.3%	-3.4	96.6%
クロマツ群落	419.7	1.2%	356.4	1.0%	339.7	1.0%	340.1	1.0%	-79.6	81.0%
イロハモミジークヤキ群落	1.1	0.0%	1.1	0.0%	1.1	0.0%	1.1	0.0%	0.0	100.0%
ムクノキークエノキ群落	2.8	0.0%	2.8	0.0%	2.8	0.0%	2.8	0.0%	0.0	100.0%
ハンノキ群落	0.0	0.0%	0.3	0.0%	0.3	0.0%	0.3	0.0%	0.3	-
ヤナギ高木群落 (V I)	0.6	0.0%	0.6	0.0%	0.0	0.0%	0.0	0.0%	-0.6	0.0%
マサキトベラ群落	33.4	0.1%	39.8	0.1%	41.3	0.1%	41.3	0.1%	7.9	123.7%
オニヤブソテツハハミワ群落	35.0	0.1%	39.3	0.1%	39.1	0.1%	39.1	0.1%	4.1	111.7%
シイ・カシ二次林	3605.0	10.6%	3609.9	10.6%	3791.0	11.0%	3765.7	11.0%	160.7	104.5%
タブノキヤブニッケイ二次林	179.8	0.5%	184.0	0.5%	211.1	0.6%	211.1	0.6%	31.3	117.4%
ハクサンボクマテバシイ群落	247.4	0.7%	245.6	0.7%	297.6	0.9%	300.3	0.9%	52.9	121.4%
コナラ群落 (V I I)	5.7	0.0%	6.4	0.0%	94.9	0.3%	93.9	0.3%	88.2	1647.4%
アベマキ群落	0.0	0.0%	4.0	0.0%	4.0	0.0%	4.0	0.0%	4.0	-
アカメガシワーカラスザンショウ群落	32.0	0.1%	32.2	0.1%	24.5	0.1%	23.6	0.1%	-8.4	73.8%
アカマツ群落 (V I I)	398.9	1.2%	395.3	1.2%	78.8	0.2%	77.0	0.2%	-321.9	19.3%
メダカ群落	29.0	0.1%	35.8	0.1%	33.7	0.1%	34.0	0.1%	5.0	117.2%
クズ群落	7.0	0.0%	7.0	0.0%	14.4	0.0%	11.5	0.0%	4.5	164.3%
ネザサーススキ群落	4.9	0.0%	4.3	0.0%	3.3	0.0%	3.3	0.0%	-1.6	67.3%
チガヤーススキ群落	2.4	0.0%	2.4	0.0%	0.6	0.0%	1.2	0.0%	-1.2	50.0%
ダンチク群落	3.7	0.0%	4.2	0.0%	4.2	0.0%	4.0	0.0%	0.3	108.1%
伐採跡地群落 (V I I)	188.2	0.6%	149.2	0.4%	99.4	0.3%	99.4	0.3%	-88.8	52.8%
ヨシクラス	13.0	0.0%	15.6	0.1%	15.5	0.0%	15.5	0.0%	2.5	119.2%
ヒルムシロクラス	53.9	0.2%	54.0	0.2%	54.0	0.2%	52.8	0.2%	-1.1	98.0%
塩沼地植生	7.9	0.0%	8.2	0.0%	3.9	0.0%	3.9	0.0%	-4.0	49.4%
砂丘植生	66.6	0.2%	62.8	0.2%	63.8	0.2%	63.8	0.2%	-2.8	95.8%
海岸断崖地植生	3.7	0.0%	5.7	0.0%	5.7	0.0%	5.7	0.0%	2.0	154.1%
ハチジョウススキ群落	17.5	0.1%	18.1	0.1%	23.0	0.1%	23.0	0.1%	5.5	131.4%
スギ・ヒノキ・サワラ植林	5595.5	16.4%	5609.8	16.4%	5689.4	16.5%	5690.8	16.6%	95.3	101.7%
クロマツ植林	5.8	0.0%	37.1	0.1%	37.1	0.1%	37.1	0.1%	31.3	639.7%
外国産樹種植林	1.5	0.0%	1.5	0.0%	1.5	0.0%	1.5	0.0%	0.0	100.0%
その他植林	4.1	0.0%	8.7	0.0%	8.7	0.0%	8.7	0.0%	4.6	212.2%
クスギ植林	10.7	0.0%	10.7	0.0%	10.7	0.0%	10.7	0.0%	0.0	100.0%
クスノキ巨木林	38.0	0.1%	38.5	0.1%	38.7	0.1%	38.7	0.1%	0.7	101.8%
竹林	479.3	1.4%	502.1	1.5%	658.0	1.9%	650.5	1.9%	171.2	135.7%
ゴルフ場・芝地	196.3	0.6%	182.1	0.5%	182.1	0.5%	182.1	0.5%	-14.2	92.8%
牧草地	65.7	0.2%	78.6	0.2%	81.1	0.2%	81.1	0.2%	15.4	123.4%
路傍・空地雑草群落	473.7	1.4%	513.1	1.5%	457.2	1.3%	446.4	1.3%	-27.3	94.2%
果樹園	193.4	0.6%	163.1	0.5%	131.6	0.4%	127.0	0.4%	-66.4	65.7%
畑雑草群落	1022.9	3.0%	970.3	2.8%	894.2	2.6%	892.1	2.6%	-130.8	87.2%
水田雑草群落	2016.1	5.9%	1983.5	5.8%	1912.0	5.6%	1879.1	5.5%	-137.0	93.2%
放棄水田雑草群落	21.2	0.1%	21.2	0.1%	18.9	0.1%	19.2	0.1%	-2.0	90.6%
市街地	12890.8	37.8%	13053.7	38.3%	13303.1	38.7%	13436.9	39.1%	546.1	104.2%
緑の多い住宅地	1917.1	5.6%	2003.7	5.9%	2039.1	5.9%	1995.3	5.8%	78.2	104.1%
太陽光発電施設※	-	-	-	-	-	-	7.4	0.0%	7.4	-
工場地帯	1422.9	4.2%	1444.3	4.2%	1488.7	4.3%	1635.2	4.8%	212.3	114.9%
造成地	902.6	2.7%	808.5	2.4%	811.9	2.4%	651.2	1.9%	-251.4	72.1%
開放水域	634.1	1.9%	565.9	1.7%	557.1	1.6%	533.2	1.6%	-100.9	84.1%
自然裸地	151.7	0.4%	156.1	0.5%	142.0	0.4%	142.0	0.4%	-9.7	93.6%
総計	34084.9	100.0%	34112.5	100.0%	34382.3	100.0%	34354.7	100.0%	269.8	100.8%

出典：福岡市環境局資料

### (3) 哺乳類・両生類・爬虫類の確認地点数

多様な種が確認されています。多くの種で確認地点数の増加が確認され、アライグマ等の外来種も同様に増加している傾向にあります。

ネズミ類を中心に、2022(令和4)年度に確認されなくなった種も何種か見られます。

表 8 哺乳類の確認地点数の変化

分類	種名	確認メッシュ数		
		平成 12 年度	平成 19 年度	令和 4 年度
哺乳類	ジネズミ	0	2	0
	ヒズミ	2	0	0
	コウベモグラ	24	25	26
	アブラコウモリ	3	8	0
	タヌキ	10	12	17
	キツネ	0	7	1
	テン	5	12	15
	イタチ属の一種	18	26	23
	アナグマ	0	4	4
	ニホンイノシシ	12	19	20
	スミスネズミ	0	1	0
	ハタネズミ	2	0	0
	カヤネズミ	4	5	7
	アカネズミ	8	10	0
	ヒメネズミ	4	2	0
	ノウサギ	3	6	9
	キクガシラコウモリ	0	0	1
	モモジロコウモリ	0	0	1
	アライグマ	0	0	19
	シベリアイタチ	0	0	2
ニホンジカ	0	0	1	
合計種数		11	13	14

 : 前回より減少

 : 前回より増加

出典:平成 19 年度自然環境調査(ほ乳類・は虫類・両生類の生息状況)委託報告書(2008(平成 20)年)  
令和 4 年度自然環境調査(ほ乳類・は虫類・両生類の生息状況)委託報告書

表 9 両生・爬虫類の確認地点数の変化

分類	種名	確認メッシュ数		
		平成 12 年度	平成 19 年度	令和 4 年度
両生類	カスミサンショウウオ	1	0	1
	ブチサンショウウオ	2	1	2
	イモリ	4	3	0
	ニホンヒキガエル	1	2	0
	アマガエル	14	9	9
	タゴガエル	6	7	9
	ニホンアカガエ	3	8	7
	トノサマガエル	2	2	4
	ヌマガエル	17	20	20
	ウシガエル	9	9	14
	ツチガエル	1	1	2
	シュレーゲルアオガエル	0	1	1
	カジカガエル	1	2	4
	アカハライモリ	0	0	3
	ヤマアカガエル	0	0	1
爬虫類	クサガメ	2	2	2
	イシガメ	2	2	2
	ヤモリ	13	19	28
	トカゲ	7	6	14
	カナヘビ	28	26	27
	シマヘビ	9	11	7
	ジムグリ	0	1	1
	アオダイショウ	4	4	4
	ヒバカリ	2	2	1
	ヤマカガシ	5	7	4
	マムシ	2	0	1
	ミシシippアカミミガメ	0	0	11
	シロマダラ	0	0	1
合計種数	22	22	26	

■ : 前回より減少

■ : 前回より増加

出典:平成 19 年度自然環境調査(ほ乳類・は虫類・両生類の生息状況)委託報告(2008(平成 20)年)  
令和 4 年度自然環境調査(ほ乳類・は虫類・両生類の生息状況)委託報告書

